

# 津波

函館市医師会  
函館新都市病院

あさ い やすふみ  
浅井 康文

鴨長明の方丈記で語られるように、日本は災害の歴史の連続である。寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやってくる」が、現在は「災害は忘れないうちにやってくる」となり、新型コロナ感染も学会発表などで災害とされている。

津波という日本語が、英語でtsunamiと認知されたのは、100年に一度の災害と言われたスマトラ島沖地震（2004年）からである。一般的に英語として紹介したのは小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の英文短編集の中で、tsunamiという言葉が使われた。1854年の安政南海地震の和歌山県での津波の話で、戦前には教科書に掲載された。村の高台に住む庄屋の濱口儀兵衛（生き神様と呼ばれた）は、地震のあと、海水が退くのを見て津波に気づいた。村人たちに知らせるため、自分の田にある稲の束（稲むら）に火をつけ、消火のために高台に村人たちが集まり、命を守ったとの言い伝えである。JICAではスマトラ島沖地震後、この日本の「言い伝え」の英文を、東南アジアの子供達へ教育のパンフレットとして配布している。また、スマトラ島沖地震では、溺水での津波肺という言葉が脚光を浴びた。

今年（2021年）で、北海道南西沖地震から28年が経過した。1993年7月12日、22時17分頃の夜間に、地震、津波、山崩れ、火災が発生した。被災者：死者202人と行方不明者28人、重症者81人と報告されている。現在、奥尻島は、奥尻島津波館で被害の全容を把握でき、島の周囲約84kmの内、約14kmを11mの防波堤が囲んでいる。新築された青苗小学校は、津波シェルター（高床式）のような造りで、2階に職員室、2～3階が教室となっている。避難のためのドーム形式の通路や、一時避難のための地盤の7m上の人工地盤、遠隔操作できる水門（震度4以上を検知すると約1分間の非常放送後、自動的にゲートが降下するシャッター）などがある。今後の問題点として、設備・防波堤などの、老朽化と維持費などであろう。北海道南西沖地震では、重傷者の搬送は、北海道や自衛隊のヘリコプター搬送が、函館：20例、札幌：7例、倶知安：4例、乙部：2例が行われた。市立函館病院では、溺水で重症肺障害（津波肺）の治療が行われた<sup>1)</sup>。この地震で、日本の災害医療の一つの基礎が誕生した。地震の1ヵ月後に、全国の救急で災害研究の関心にある有志が集まって、奥尻島を調査したことである。夜間の宿舎での議論の中で、日本に災害研究の集まりが必要と

の結論に達し、1995年日本集団災害医研究会が発足した。そして1995年1月17日の阪神淡路大震災の翌年、1996年1月に第1回が、大阪府立千里救命救急センター名誉所長の太田宗夫を会長に開催された。2000年には日本集団災害医学会、2010年からは現在の日本災害医学会と改称しており、次回で第27回を迎える。

阪神淡路大震災では、瓦礫の下の医療に伴う挫滅症候群に対する透析療法がクローズアップされた。一方、2011年3月11日の東日本大震災は、津波と福島原発事故との複合災害である。そして「津波でんでんこ」の言い伝えが脚光を浴びた。津波が起きたら周囲を助けようとするのではなく、てんでんばらばらに高台に逃げ、まずは自分の命を守れという意味である。明治三陸大津波（1896年）と昭和三陸大津波（1933年）の、三陸大津波により壊滅的な被害を受けた田老地区は、高さ約10m、全長約2.4kmの巨大な防潮堤を1979年に完成し、万里の長城と呼ばれた。その田老地区は昭和三陸大津波から70年後の2003年に「津波防災の町」を宣言したが、8年後の東日本大震災で再び巨大津波にのまれ、181人の犠牲者を出した。死因の約9割は溺死で、内側から津波の襲来が見えないとの指摘もされた。花巻空港からはDMATにより、自衛隊機による新千歳空港への4名の搬送が行われた。1名は重度の津波肺で、札幌医科大学ICUで呼吸管理を行い救命し、その後宮古市の住人と判り、息子さん2人が迎えに来られた。また、寒冷期の津波での低体温症を防止することも指摘されている。

大災害での通信手段の維持も難しい。阪神淡路大震災直後に、通信のため、米国モトローラ社からの携帯電話の提供の話があったが、実現しなかった。東日本大震災直後の宮古市では、数週間携帯は不通であった。2018年9月6日の北海道胆振東部地震でも、当院の院内携帯電話は3日ほど使用できなく、これからの課題であろう。

## 文献

- 1) 吉川修身他：津波による溺水患者の4症例、ICUとCCU、18:1187-1192, 1994